

# 喜楽苑だより 下町 ～ほんわか通信～

特別養護老人ホーム  
地域サポート施設 喜楽苑  
〒660-0807 尼崎市長洲西通2丁目8番3号  
TEL: 06-6488-9287 http://www.kirakuen.or.jp

喜楽苑地域ケアセンター  
あんしん24  
〒660-0806 尼崎市金楽寺町2丁目7番7号  
TEL: 06-4868-5525

2026年新年発行  
第266号

明けましておめでとうございます。  
皆様におかれましては、お健やかに  
新年をお迎えになられたこととお慶び  
申し上げます。

昨年日本は昭和100年、戦後80年、阪  
神淡路大震災から30年を迎えました。  
また、日航機墜落事故から40年、福知  
山線の脱線事故から20年の節目の年で  
もありました。世界では激化する武力  
紛争が深刻な人道危機を招き、過去の  
歴史や灾害・事故の教訓から、何物にも  
代えがたい「命の尊さ」について考え方  
せられる一年となりました。

また、大阪では55年ぶりに万博が開  
催されました。きらくえんでは入居者  
自治会の発案で職員とご入居者が博覧  
会に出かけました。熱中症が心配でし  
たが、車椅子で元気に会場内を巡り思  
い出に残る一日となりました。

謹んで新年のご挨拶を申し上げます

社会福祉法人きらくえん 理事長 土谷千津子

本年は皆様にとりまして、素晴らしい一年とな  
りますようお祈り申し上げます。

2026年元旦

## 市川禮子名誉理事長と喜楽苑だよりを手に取って

1988年6月号1面に掲載された「苑長就任にあたって」と題したあいさつ文。  
手書きの文字で綴られた言葉が並んでいます。

「こんなこと、書いていたねえ」  
当時は毎月1日発行。原稿はすべて手書きで、印刷して配布していました。

1988年4月、喜楽苑が開設5年を迎えた年に苑長に就任。  
当時は決して順風満帆ではなく、責任の重さを感じる日々だったといいます。  
「逃げ出したくなったこともあります。でも、ここを守るのは自分しか  
いないと思って向き合っていました」  
その支えとなったのが、職員やご入居者、ご家族の存在でした。  
「みんなの支えがなければ、続けられなかつたと思います」  
それから38年。手書きの『喜楽苑だより』に込められた想いは、  
266号まで大切に受け継がれてきました。

【中央】1992年9月号  
感動を思わせるような  
「いくの喜楽苑」完成

← 1997年1月号  
「あいや喜楽苑」がオープン

↑ 1988年  
手書きで毎月発行

2001年4月号  
「けま喜楽苑」完成 →

【中央】2007年  
法人名称が  
「尼崎老人福祉会」から  
「社会福祉法人きらくえん」へ

2011年2月  
時間対応の  
高齢者見守り事業がスタート ↓

お知らせ  
2026年度から「喜楽苑だより」を今号でお休みとさせていただきます。  
夏号から「きらくえん」の法人広報誌に統合・リニューアルします。  
当施設のとりくみは引き続きInstagram・ホームページでもご覧いただけます。

©KIRAKUEN.SAIYO

## ふるさと訪問

入居者の「もう一度、故郷を訪ね、親族のお墓参りをしたい」という願いから生まれたのが、「ふるさと訪問」です。お一人おひとりの大切な思い出の場所へ出かけます。同行した職員は、その方の歩んでこられた人生に深く触れ、「人生の完成期を、よりよいものにしたい」という切実な思いを胸に帰ってきます。この体験こそが、きらくえんが大切にしてきた個別ケアの原点です。ふるさとで出会うご親戚や、古くからのご友人との昔語り。その一つひとつが、その方の人生を鮮やかに映し出してくれます。喜楽苑の「ふるさと訪問」をいくつかご紹介します。

### 上田 倪太郎さん

1989年、多紀郡丹南町（現・丹波篠山市）へ。生まれ故郷の丹南町には、40～50年もの間帰ることができずにおられましたが、甥御さんや当時の町長さんのあたたかいご協力により、今回の訪問が実現しました。かつて議員を務められていた上田さんは、町長さんとの歓談の後、甥御さんと生家を訪問。お母さまとの思い出話に花を咲かせ、町並みを巡るドライブを楽しみ、「変わったなあ…」と言われながら、何度も何度も後を振り返っていました。



### 仲 モモエさん

2008年、和歌山県への「ふるさと訪問」は、息子さんやお孫さんのあたたかなご協力により実現しました。ご自宅周辺を車いでゆっくりと散歩し、懐かしい景色を味わうひととき。ご家族と熊野本宮大社を参拝し、ホテルではご馳走を囲みながら、家族そろっての時間を過ごされました。仲さんの娘さんからは「私たちにとっては宇宙旅行に行くよりも嬉しい旅行になりました」との言葉をいただきました。

### 森本 和加子さん

2024年、島根県への「ふるさと訪問」。「元気なうちに、姉に会っておけばよかった」との思いをきっかけに、息子さんご夫婦や姪御さんのご協力のもと実現しました。お姉さまとの再会やお墓参りを経て、親戚が集う夕食では昔話に笑顔が広がりました。「こんな日が来るなんて思っていませんでした。本当に幸せです」と森本さんは何度もその言葉をくり返していました。

これからも、ふるさと訪問を通して触れた人生の重みを日々のケアに生かし、お一人おひとりの「その人らしい暮らし」を大切にしています。



## 新年あけましておめでとうございます。

昨年、国内では、物価高騰による不安定さが続きました。世界では、紛争や対立の長期化や気候変動による災害が相次ぎ、こうしたできごとは決して遠い話ではなく、私たちの暮らしや福祉の現場にも影響を及ぼしています。

喜楽苑にとって、住環境の整備と地域交流にとりくむ1年となりました。11月からは改修工事が始まり、入居者・利用者のみなさまの暮らしに直結する部分を、順次リニューアルしています。

また、7月の防災イベント「イザ！カエルキャラバン」、10月の「喜楽苑秋まつり」、11月の「小田まつり」への出店、近隣小学校への出前授業など、地域の方々と顔を合わせ、交流する機会を多く持つことができました。

法人内では、「平和」について学びを深める管理職研修が行われ、初めて福島県の被災地を訪れました。人の営みが失われた街の静けさに触れ、災害や事故は決して過去のできごとではなく、今も続く課題であることを実感しました。便利さの裏にある犠牲や矛盾を直視し、「自分ごと」として考え続ける姿勢は、福祉の仕事にも通じるものだと感じています。

施設長として、こうした問い合わせから目をそらさず、自分なりの軸をもち、職員とともに語り合える風土を少しずつ積み重ねていきたいと、気持ちを新たにする経験でした。日々の実践や対話の中で、大切に生かしていきます。

本年も、入居者・利用者のみなさまやご家族、地域のみなさまに信頼される、喜楽苑らしい施設運営を目指してまいります。どうぞよろしくお願いいたします。

喜楽苑 施設長 堀口 明子



## 令和8年 新年祝賀会

2026年1月1日、入居者の皆さんと職員が集い、新年祝賀会を開催しました。紅白幕や華やかな飾り、そして正装した職員の姿を目にして、「今年もお正月が来たって感じがするね」と笑顔で話され、祝賀会が始まる前から、会場はあたたかな期待に包まれていました。

代表としてご挨拶をお願いしていた方は、「うまくできるかなあ…」と少し緊張されたご様子でしたが、当日は皆さんを明るく盛り上げてくださり、あたたかな乾杯の音頭とともに、和やかに会が始まりました。施設長からは、無病息災を願ってお屠蘇がふるまわれ、豪華なお節料理を前に、「おめでたいものがいっぱい、食べられるかな」と、笑顔で語り合いながら召し上がられていきました。

午後からはご家族も次々と来苑され、皆さんで近くの神社へ初詣に出かけました。澄んだ冬空の下、一年の無事と健康を静かに祈っていました。昨年に続き、今年も晴天に恵まれ、皆さまとともに新春を迎えたことを、職員一同、心よりうれしく感じています。この一年も、皆さまが健やかに過ごされますよう、願っています。



今年もよろしく  
お願  
いしま  
す

